

Hamlet の memory について

細 川 眞

1

F. A. Yates の著書 *The Art of Memory* によれば、ヨーロッパにはギリシャ・ラテン時代からルネッサンスに至るまで〈記憶術〉の伝統があって、人間の memory が非常に重要なものであると考えられていた。例えば Plato は、“there are latent in our memories the forms or moulds of the Ideas, of the realities which the soul knew before its descent here below” と、memory にはイデアの鋳型が潜在していて、真の認識とは “sense impressions” をこの鋳型に合わせることであると言ったし、⁽¹⁾ ローマの Cicero は *De Inventione* の中で Virtue を後に four cardinal virtues として知られる Justice, Fortitude, Temperance, Prudence に分けて、その中の Prudence は、*memoria, intelligentia, providentia* から成立とした。⁽²⁾ この Prudence は後に Titian による Prudence 像 (狼, ライオン, 犬の頭で表わされている) で有名になるが、この考えは中世のスコラ哲学者 T. Aquinas や Albertus Magnus などによって引き継がれ、とりわけ Prudence の中でも memory が最も必要なものとされた。

...of all the things which belong to Prudence the most necessary of all is memory, because from past things we are directed to present things and future things. ⁽³⁾

またクリスチャン・プラトニストである St. Augustine は、人間の soul が持つ三つの力として Understanding, Will と共に Memory を挙げ、そして Plato に従って Memory の中に聖なるものの認識が本来備わ

っていると考え、その中に神を求めようとした程である。

It is as a Christian that Augustine seeks God in the memory, and as a Christian Platonist, believing that knowledge of the divine is innate in memory. ⁽⁴⁾

このように memory には、古来非常に高い価値が与えられてきたが、この memory の力は気質の点では特に憂鬱質の人間に強いとされた。十三世紀のイタリアの Boncompagno da Signa は、*“Of the four humours, the sanguine and the melancholic are the best for memory; melancholics in particular retain well owing to their hard and dry constitution”*⁽⁵⁾ と言っているし、A. Magnus は melancholy でも特に *“the dry-hot melancholy, the intellectual, the inspired melancholy”*⁽⁶⁾ がそうであると言う。

以上のような背景の中で Hamlet を見てみると、彼は第三独白で *“the devil... / Out of my weakness and my melancholy, / ... / Abuses me to damn me”* (2. 2. 603-07)⁽⁷⁾ と自分でも言っているように憂鬱質の人間であるのは間違いないから、一幕二場で彼だけが見せる父への追悼や、亡霊と出会った時の *“Remember thee? / Ay thou poor ghost whiles memory holds a seat / In this distracted globe”* (1. 5. 95-97) という言葉が示す彼の memory への執着は、単に偏執狂的なそれだと簡単に片付けるわけにはいかない。そこで本稿では memory の伝統を参考にしながら Hamlet の memory が持つ意味を考察する。

2

この劇は人々に過去を思い出させる、いわば memory の象徴とも言うべき亡霊の出現で始まり、最後は Fortinbras が *“I have some rights of memory in this kingdom”* (5. 2. 387) と、記憶の中にある過去の権利を主張してデンマークの王位に即いて終る、という構造の点から言っても、memory がこの劇のテーマになっているのは疑い余地がないだろう。そこで Hamlet の memory を考える時、この memory の問題が、

他の主要人物とどう関係しているかにも注意を払う必要がある。Claudius や Gertrude 達は memory に対してどういう関係にあるのだろうか。これを考えるには、Shakespeare においては劇の冒頭に問題点が提示されていることが多いから、主要人物が初めて登場する一幕二場を見てみるのがよい。

ここで黒い喪服を着ている Hamlet と対照的に、戴冠式を終えたばかりの Claudius 等は明るい華やかな衣装を身につけている。この服の対照は明らかに両者の対立を暗示しているが、Gertrude は Hamlet に

.....cast thy nighted color off,

 Do not for ever with thy vailéd lids
 Seek for thy noble father in the dust, (1. 2. 68-71)

と喪服を脱いで父の追悼をやめるように求める。更に Claudius も

.....to persever
 In obstinate condolement is a course
 Of impious stubbornness, 'tis unmanly grief,
 It shows a will most incorrect to heaven, (Ibid. 92-94)

と、執拗な悲しみは神に対する罪とさえ言って、この“unprevailing woe” (Ibid. 107) を地に投げ棄てるように言う。二人はここで、“’tis common, all that lives must die” (Ibid. 72) と正論を説いている格好をとりながら、本心では Hamlet に早く父を忘れてもらいたがっているのだ。この事から明らかなように、Claudius や Gertrude の memory に対する関係は oblivion なのである。一方 Hamlet は、自分を真に表わすことのできるものは、“inky cloak” (Ibid. 77) や “the fruitful river in the eye” (Ibid. 80) 等の “show” ではなく、“I have that within which passes show” (Ibid. 85) と、“within” 即ち心の中にある memory だと主張する。このように劇には Hamlet の <memory> 対 Claudius を中心とする現体制側の <oblivion> という対立構造がある。

一体このような <memory> 対 <oblivion> の対立は、それでは何を示

唆するのだろうか。ここでルネッサンス時代における memory の意味を簡単に触れておきたい。ルネッサンスにおける〈記憶術〉は G. Camillo, G. Bruno, R. Fludd 等によってヘルメス学やヘブライ神秘主義の影響を受けて魔術的な色彩を持つようになるが、その基本はネオ・プラトニズムにあって、彼等の共通した memory の特徴は、一言でいえば、microcosm である人間がその memory の中に macrocosm を捉え、それを記憶して、小宇宙である人間と大宇宙の調和を計ろうとした点である。

Fludd's occult art of memory is an attempt to reproduce or re-create the macrocosm-microcosm relationship by establishing, or composing, or making conscious in the memory of the microcosm the world which he contains, which is the image of the macrocosm, which is the image of God. ⁽⁸⁾

Yates の *The Art of Memory* の中にある折り込み図, Camillo の Memory Theatre を見れば一目瞭然であるように、神が創造した統一ある世界を時間的空間的に、記憶術を使ってすべてを把握しようとするのがルネッサンスの memory であった。

Hamlet の memory が孕む問題は、実は、この世界との関係にあるのである。それ故一幕二場で彼が見せる memory への固執は、Claudius が言うような道理, "whose (i. e. reason's) common theme / Is death of fathers" (1. 2. 103-04, 括弧筆者) がわからなくて、子供のように無暗に嘆き悲しんでいるという感傷的な次元のものではない。それは、父を頂点とする過去の調和あるデンマーク、更には過去の統一ある世界像を人々が早忘れてしまった中で、彼一人 memory の中で守り維持している prudent な態度なのである。つまり彼の〈memory〉はこの劇では Prudence であり、それは又、世界の調和、統一を意味するのだ。彼の memory に生きている過去の人間像とは、

What a piece of work is a man, how noble in reason, how infinite in faculties, in form and moving, how express and admirable in action, how like an angel in apprehension, how like a god; (2. 2. 307-10)

というように、神のイメージで造られた小宇宙のそれであり、過去の世界像

とは “majestical roof fretted with golden fire” (Ibid. 305) で包まれた “most excellent canopy” (Ibid. 303) の大宇宙である。そして劇はそれに呼応するように、先王には、“Hyperion” の髪を持ち、“Jove himself” の額をし、“Mars” の眼を持ち、“Mercury” の立ち振舞をする (3. 4. 56-58), というように神のイメージを与え、Hamlet には

The courtier's, soldier's, scholar's, eye, tongue, sword,
Th' expectancy and rose of the fair state,
The glass of fashion, and the mould of form,
(3. 1. 154-56)

と完全無欠な理想の男性像のイメージを与え、Ophelia には “rose of May” (4. 5. 157) と、これまた理想の女性像を与えて、まるで墮落以前の楽園を思わせるような、調和あった過去の世界を暗示している。⁽⁹⁾

ところが第一独白で Hamlet が嘆くように、母 Gertrude は、夫が死んで一ヶ月もしないうちに “so loving to my mother, / That he might not beteem the winds of heaven / Visit her face too roughly”

(1. 2. 140-42) とある程の優しい夫を忘れて、Claudius と自然の掟を破る近親相姦の結婚をして、⁽¹⁰⁾ 世界を “unweeded garden / That grows to seed” (Ibid. 135-36) に落とすってしまったのだ。換言すれば、神の代理人たる王自らが神の定めた自然を破壊したことになる。“unweeded garden” というイメージが、いみじくも墮落後の世界を暗示しているように、これは正しく oblivion による過去の完全な秩序ある世界の破壊である。この例が単的に象徴しているが、Claudius 等の <oblivion> が究極的に意味するものは、Hamlet の <memory> とは対照的に世界の解体に他ならない。そしてこの oblivion はデンマーク中に蔓延していて、先王在世中には、Claudius にいい顔しなかった大衆も彼が王になると、その事を忘れて、大枚を叩いて彼の肖像画を買い求める有様なのだ。

Ham.those that would make mows at
him while my father lived, give twenty, forty, fifty,
a hundred ducats apiece for his picture in little. (2.2. 367-69)

Hamlet の言う通り、この oblivion には “something...more than natural, if philosophy could find it out.” (Ibid. 370-71) がある。このように Hamlet における memory を考えてみると、そこには実に大きなテーマに発展する問題が潜んでいると言ってよいだろう。

3

ところで劇中劇の王の言葉、“purpose is but the slave of memory” (3. 2. 187) は、oblivion の Claudius 側のモットーとも言うべき言葉で、それは彼等の本質を鋭く言い当てている。劇王妃が、死後の妻の裏切りを恐れている劇王に、“Such love must needs be treason in my breast” (Ibid. 177) と強く再婚を否定したところで、その “purpose” も memory が弱ければすぐ消えて忘れられてしまうものとなる。この事は Gertrude と先王の場合に丁度当嵌っていて、Hamlet が後に非難するように、彼女は memory の力が弱いので、“marriage vows” を “dicers’ oaths” のように不実なものとし (3. 4. 44-45), “the body of contraction” から “The very soul” を抜き取り (Ibid. 46-47), 夫が死ねばすぐに夫への愛の誓いも忘れて、情欲の虜となり Claudius の元へ走ったのだ。

この oblivion によって世界は、二つの重要なものを失う。それは、愛と言葉である。愛は memory の力によってのみ永続するが、memory が無くなればこのように情欲と化する。そして言葉は memory が欠けると “sweet religion” が “A rhapsody of words” になったとあるように (3. 4. 47-48), そこから意味を剥ぎ取られ、無意味な記号と化してしまう。

愛の情欲化の問題は、Hamlet と Ophelia の愛にもその影を投げかけ、二人の愛に破局をもたらしている。Ophelia は Hamlet を愛しているにもかかわらず、兄や父によって Hamlet の愛は、若者特有の “a toy in blood” (1. 3. 6) であり、その誓いは “brokers/……/The better to beguile” (Ibid. 127-31) と吹き込まれ、愚かにも彼女は父の命令に従って、“I have remembrances of yours/That I have longed to re-

deliver” (3. 1. 93-94) と Hamlet に愛の “remembrances” (=love-tokens) を返してしまう。これによって、既に女の愛に不信を抱くようになった Hamlet が、Ophelia も母のように愛の memory のない、情欲の女になってしまったと誤解するのも当然なのである。それで彼女に失望して、‘brothel’ の意味を含んだ pun を使って “Get thee to a nunnery” (Ibid. 121) と激しく毒づくことになる。二人の愛は、不幸にも愛が情欲でしかなくなった社会に巻込まれて、その犠牲になってしまったと言えよう。

一方、言葉の形骸化の問題は Polonius 家に集中していて、劇はいかにこの問題がデンマーク中に広がっているかの一端をコミカルに見せている。周知のように Polonius は多弁でありながら、Gertrude が “More matter, with less art” (2. 2. 95) と叱責しているようにその言葉に内容がなく、Hamlet が指し示す雲の形について “a camel,” “a weasel,” “a whale” (3. 2. 380-84) だと適当に答える人間であるし、Laertes にしてもフランスへ発つ前に父から処世術の教訓を “in thy memory / Look thou character” (1. 3. 58-59) と要求されながら、Reynaldo が見張役として派遣されているところを見ると、Ophelia が、

Do not, as some ungracious pasters do,
Show me the steep and thorny way to heaven,
Whiles like a puffed and reckless libertine
Himself the primrose path of dalliance treads,
And recks not his own rede. (1. 3. 47-51 イタリックス筆者)

と皮肉を言っているように、どうも忘れてしまった観があるのは否めない。その Laertes が Ophelia に、Hamlet の愛に関して忠告を与える際 “remember well / What I have said to you” (Ibid. 84-85) と言っているのだから滑稽である。Polonius が Hamlet に “What do you read?” (2. 2. 191) と問うた時に、Hamlet が “Words, words, words” (Ibid. 192) と答えたが、それは、oblivion のために言葉が意味を喪失してしまった世界に対する痛烈なアイロニーに聞こえないだろうか。

Oblivion は又、時と行動の問題にも係わってくる。前述した劇王の言

葉に則して言えば、何らかの “purpose” を持っている時, memory が弱ければその “purpose” はすぐ消えてしまうから, 忘れないうちにすぐ実行しなければならなくなり, そこに行動の素早さ, 換言すれば, 時との競争の問題が起こってくる。この問題の背景にはソネット122番で,

Thy gift, thy tables, are within my brain
Full characterized with lasting memory,
Which shall.....remain
Beyond all date even to eternity.

とあるように memory は時を克服するが, memory がなければ, ソネット19番が言うように,

Devouring Time blunt thou the lion's paws,
And make the earth devour her own sweet brood,
Pluck the keen teeth from the fierce tiger's jaws,
And burn the long-lived phoenix in her blood,
Make glad and sorry seasons as thou fleet'st,
And do whate'er thou wilt swift-footed Time
To the wide world and all her fading sweets:

鋭いライオンの爪足も虎の歯もすべて “Devouring Time” によって食い尽される, という思想があり,⁽¹¹⁾ そのために時に滅ぼされる前に行動する必要が起ってくることになる。

この事を最もよく表わしているのは, Claudius が Hamlet によって父を殺された Laertes を復讐に駆立てる場であろう。そこでは Claudius は Laertes に, “love is begun by time /……/ Time qualifies the spark and fire of it” (4. 7. 110-12) と, 愛は時によって滅びるといふ, 正に自分の原理—愛の oblivion—を指摘して, だから父への愛情を忘れないうちにしたい時にすぐ復讐すべきだと説く (“That we would do / We should do when we would: for this ‘would’ changes... Ibid. 117-18)。そして Laertes も, 叛逆の場で “Antiquity forgot, custom not known” (4. 5. 104) とある忘れっぽい民衆と同様に oblivion の人間であるので, これを受けてすぐ行動を起こす。

従来から H. H. Furness 等によって *Hamlet* における double time (fast time と slow time) が指摘され、⁽¹²⁾ fast time については、T. F. Driver が “part of the evil rests in the fact that events have moved too fast” と言っているが、⁽¹³⁾ 時の速さは善悪に関係するよりもむしろ、この例のように memory の弱さ、oblivion と関係があるのではないだろうか。Claudius と Gertrude が “wicked speed” (1. 2. 156) で結婚したのも彼等が先王の事はすぐ忘れることができたからだろう。それに又、Claudius が劇の冒頭、Fortinbras による侵略問題を昼夜兼行、“sweaty haste” (1. 1. 77) で素早く対処するのは、N. Alexander が言っているように、⁽¹⁴⁾ Fortinbras が “a reminder to court and audience of the heroic combat fought by King Hamlet” であるので人々の記憶から少しでも早く先王を忘れさせようと、oblivion をその目的としたからではないだろうか。しかしこうした memory のない人間の行動というものは、J. P. Hammersmith が “Without the act of remembrance, all actions become futile and insignificant, for they perish in the very doing” と言う通り、⁽¹⁵⁾ 成就と共に消滅するから全く不毛で無意味なのである。そして時は、行動、出来事の連続によって継続はするが、それは時がばらばらになるだけでそこに時の統一は望めない。時に打ち勝ち、時を統一させるのは memory だけなのである。

....the very act of remembering itself keeps time unified, keeps it from fragmenting. ⁽¹⁶⁾

以上のように memory のない世界では、愛は持続せず一時的な情欲に取って代わられ、言葉はその意味を失い、時は断片化され、あるものは、感覚、肉体、物質、行動という mutable な物ばかりとなり、そこには spiritual な世界の調和、統一は全くない。世界は粉々に解体されているのである。

4

こうした文字通りの “The time is out of joint” (1. 5. 188) の中

で、外れた関節を接合するために生まれて来たのが Hamlet である (“I was born to set it right” Ibid. 189)。彼は oblivion によって荒廃し墮落した世界に、時には自らもその影響を被りながら、又時には狂気寸前にまで追い込まれながら、あらゆる価値が信用できなくなっている中で、彼にとっては唯一の安定した確実なもの—memory を支えにそれを通して世界の統一、調和を目指すことになる。Hamlet に memory がなければ彼は完全に発狂していたであろうが、デンマークは memory がなくなったために狂ってしまったのだ。そこで彼は、先ず oblivion の人々に過去を思い出させ、memory を呼起こすことから始める。

前述したようにルネッサンスの memory は、そこに世界を映し出しそれを把握する力だと考えられた。それはいわば鏡としての memory である。バイコンも、「伝道の書」より「神はまた人の心のなかに世界を入れられた」(3の11)という言葉を用いて、「神は人間の精神を鏡かレンズかのようにつくられたので、それは世界をうつすことができ、目が光をやどすことを喜ぶように、全世界の像をやどすことを喜ぶ……」と述べているが、¹⁷⁾ Hamlet の memory にはこの世界を映す鏡としての機能があり、その点でこれには “to hold as 'twere the mirror up to nature” (3. 1. 20-21) を目的とする “play” との類似が見られる。この劇では、共に鏡として自然、世界、宇宙を映し出す “play” = “memory” の構図が成立つと言ってよいだろう。そしてこれの縮図となっているのが Play Scene だ。

周知のように劇中劇は、Claudius が先王を殺して Gertrude を奪った「過去」の劇による再現であるが、それは又過去の memory でもある。Hamlet はこの play, memory という二重の鏡を Claudius の前に置き、亡霊の言葉の真偽を確かめると共に彼に過去を思い出させて、“catch the conscience of the king” (2. 2. 609) とあるように世界を破壊した罪を思い知らせようとする。そしてその結果は Prayer Scene に現われていて、そこで Claudius は過去を思い出し

O, my offence is rank, it smells to heaven,
 It hath the primal eldest curse upon't,
 A brother's murder! (3. 3. 36-38)

と世界を墮落させた原罪を意識するような自己の大罪に気づくのである。Hamlet の第一独白中にみられる “unweeded garden” のイメージや、この Cain による弟 Abel 殺しの言及などから、*Hamlet* には楽園が原罪によって墮落したイメージが原型としてあるようだが、そもそも原罪は Adam が、知恵の木の実を食べてはいけないという神の命令を忘れて Eve の誘惑に従ったためではなかったのだろうか。とすれば、デンマークの秩序を破壊した oblivion は遠く Adam と Eve の時代に遡及する問題となる。Claudius の memory はこうして一時的には復活するが、N. Alexander が指摘するように彼にはまだ、St. Augustine の言う人間における三位一体 (Memory, Understanding, Will) の Will が欠けていて、空疎な言葉はあっても罪を悔いる意思がなく (“My words fly up, my thoughts remain below” 3. 3. 97), この過去の memory もすぐ Hamlet を英国へ送る策略に取って代わられてしまう。

鏡としての memory を Hamlet は Closet Scene においても有効に使っている。そこでは彼は母 Gertrude に, “I set you up a glass/
 Where you may see the inmost part of you ” (3. 4. 19-20) と言って、過去を忘れてしまった彼女の前に過去の世界が映っている memory の “glass” を立てかけるのである。そして “What have I done?” (Ibid. 39) と自分が過去に何をしたのかも全く覚えていない彼女に、父の肖像画を示し過去の清い “modesty,” “virtue,” “innocent love,” “marriage vows” を思い出させて、それを彼女が不義を犯すことによって汚し無意味なものにしてしまった罪に気づかせる。

Such an act
 That blurs the grace and blush of modesty,
 Calls virtue hypocrite, takes off the rose
 From the fair forehead of an innocent love
 And sets a blister there, makes marriage vows
 As false as dicers' oaths..... (Ibid. 40-45)

更に続けて彼は、

heaven's face does glow,
And this solidity and compound mass
With heated visage, as against the doom,
Is thought-sick at the act. (Ibid. 48-51)

と、小宇宙の罪 (“the act”) は大宇宙にも影響を及ぼすという (i. e. 日蝕, 月蝕) 小宇宙, 大宇宙調和論にもってゆき, 彼女の行為は実に大宇宙の秩序を破壊した行いなのだと非難する。これを受けて Gertrude は初めて心の中の memory に目を向け (“Thou turn'st my eyes into my very soul” Ibid. 89), 自分の決して消えない大罪 (“such black and grainéd spots/As will not leave their tinct” Ibid. 90-91) に気づくのである。そして彼女は Claudius と違って最後までその罪に苦しみ, その罰を受けるため, Claudius が Hamlet 殺害に用意した毒杯を仰いで自ら命を絶つことになる。

Nunnery Scene の場合は, Claudius, Polonius が立ち聞きしていることもあって, 愛の memory を拒む Ophelia に直接鏡としての memory を使えず結果的には “forgetfulness”⁽¹⁹⁾ の場になってしまう。しかし Hamlet が屈折した形で, 罪人の振りをした自己を鏡にして (“I am very proud, revengeful, ambitious, with more offences at my beck, than I have thoughts to put them in,” 3. 1. 124-25), “in thy orisons/Be all my sins remembered” (Ibid. 89-90) というアイロニーを使って彼女に彼女の罪を気づかせ, 更に

.....the power of beauty will sooner
transform honesty from what it is to a bawd, than the
force of honesty can translate beauty into his likeness.
(Ibid. 111-13)

という以前の逆説を使って, appearance の beauty と reality の honesty が一致していた過去を彼女の memory の中に映し出し, それを彼女が意図的でないにせよ踏みこじった罪を思い出させようとしているのは事実であるだろう。その効果はここではすぐ生じないが, 彼女が狂気に陥

った時に現れてくる。狂気が真実を認識させるという例は *King Lear* にもあるが、*Ophelia* も気が狂って、初めて自ら知らぬ間に加担していたデンマークにおける情欲の支配に気づく。狂気中に見られる彼女の異常な程の性的強迫観念はこの事を表わしている。そして彼女はそのような世界と無縁だった Hamlet の純粋な愛を思い出し、愛の memory を復活させるのである。この事は、彼女が Hamlet だと見間違えている Laertes に “remembrance” を象徴するマンネンロウの花と、“love-thoughts” の花、パンジーを手渡しているところから窺い知れよう。

There's rosemary, that's for
remembrance—pray you, love, remember—and there is
pansies, that's for thoughts. (4. 5. 174-76)

この時彼女はそれぞれの本質について Claudius には、甘言の花 “fennel”, 忘恩の花 “columbines” を与え、Gertrude には不実の花 “daisy” を渡し、狂気の実相を見る目の確かさを裏付けている。

5

以上のように Hamlet は、oblivion の人々に memory を喚起し、過去の調和ある世界像を彼等の記憶の中に復活させようとするが、一方で彼自身あまりにもひどく腐敗した現実と直面して、彼の memory の中に生きている統一ある世界像が揺らぐのも事実である。亡霊は天使なのか悪魔なのか、人間とは何者か、死後どんな夢が訪れるのか—こうしたあらゆる存在を疑う一連の疑問の中で、彼の memory の中にある世界像を根底から揺さぶるのは神への疑いだらうと思われる。彼の神に対する疑いは、彼が “the dread of something after death” (3. 1. 78) を持ち、“The undiscovered country, from whose bourn/No traveller returns” (Ibid. 79-80) を不安がっている点から明らかであるだろうが、このような神を見失った状態では、“To be” (このままあるべき) であれ、“not to be” (このままあらざるべき) であれ世界の統一は望めない。というのも “to be” であれば、“The slings and arrows of outrageous for-

tune” (3. 1. 58) に耐えるだけでデンマークの秩序は一向に回復されな
いし, “not to be” の場合, “a sea of troubles” (Ibid. 59) に対し武
器をとって, たとえ物理的にデンマークに正義をもたらしたとしても, 神
への疑いが解決しない限り意識の中, memory の中において神を頂点と
する統一ある世界像が確立されないままとなるであろう。

このような過去の記憶を揺さぶる一連の疑いで瞑想に耽ったり, また時
には感情の支配する現実巻き込まれて “passion’s slave” (3. 2. 70)
になったりするために (“lapsed in time and passion” 3. 4. 107) 彼
にも oblivion がしばしば襲ってくるのは否定できない。

whether it be
Bestial oblivion, or some craven scruple

.....

....I do not know

Why yet I live to say ‘This thing’s to do,’

(4. 4. 39-44 イタリックス筆者)

このために亡霊が再び現われて, “Do not forget! this visitation/Is
but to whet thy almost blunted purpose” (3. 4. 110-11) と Ham-
let の消えかかる memory を強めにくるのである。ここで注意しておく
必要があるが, 亡霊の命令即ち “revenge” は, Hamlet には単に Clau-
dius を倒すことだけでなく, 世界の秩序を回復することの意味に解釈さ
れている。その点では彼は minister と同じ働きをしていると言える。
F. Bowers は, private revenge だけを行ひ scourge と違って minis-
ter は public vengeance を果たし,

A minister of God...is an agent who directly performs
some good. ...The good performed by a human minister...
may be some good which acts as a direct retribution for evil
by overthrowing it and setting up a positive good in its place.⁽²⁰⁾

と, minister による最終的な善 (正義) の回復を強調している。従って
Hamlet の場合, 過去の世界像の memory と亡霊による命令の memo-
ry とは矛盾するものではない。というのも Hamlet の “purpose” とは,

memory の中に過去の統一像を維持しながら（それは激しく揺らぐが）、それを Claudius を倒すことによって復活させることに外ならないからである。換言すれば、内においても外においても世界を統一することが、彼の目的なのである。

ところで〈記憶術〉というのは、元々人間の natural memory には限界があって永続性がないからそれを強めて持続させるための術であった。古典時代には rhetoric (*inventio, dispositio, elocutio, memoria, pronuntiatio*) の一つとして雄弁家が演説を記憶するために使われ、中世に入るとそれが倫理 (cf. Prudence) になり、聖職者が説教を記憶するのに使われた。ルネッサンス時代になるネオ・プラトニズム、ヘルメス主義、カバリズム、キリスト教が混って複雑になるが、前述したように小宇宙の memory の中に大宇宙を映してそれを統一して宇宙の聖なる根源（神や the One）に到達するための手段となった。そしてそこで使われる最も基本的な記憶術の原理は、“places” (ex. 建物の部屋) に記憶する “things” のヒントとなるイメージを一つずつ置いていって、後で “things” を思い出す時にその場所を順次訪れて行けば記憶が蘇るという方法である。

Hamlet においてこのような記憶術が直接使われていることはないが、忘れられた memory を刺激してそれを復活させる mnemonic device は数多く使われていて、⁽²¹⁾ この劇は〈記憶術〉そのものといった観がある。既に見たように亡霊の再登場がそうであるし、Nunnery Scene, Play Scene, Closet Scene はすべて memory を失った人々への mnemonic device として機能していよう。一方時々 oblivion に落入ろうとする Hamlet にもそれが使われている。例えば “I have of late……lost all my mirth, forgone all custom of exercises……man delights not me, no, nor woman neither” (2. 2. 299-313) と鬱状態になって、“what is this quintessence of dust?” (Ibid. 311-12) とか亡霊の正体などの哲学的考察に心が囚われている時には、架空の Hecuba のために泣いている旅役者が彼の目的を思い出させるし (“Remorseless, treacherous, lecherous, kindless villain! / O, vengeance!” Ibid. 584-85), 神の問題が未だ解決できずに死後の問題など “thinking too

precisely on th'event" (4. 4. 41) から "to sleep and feed" (Ibid. 35) だけに時を費している時には, Hamlet とは対照的に "invisible event" (Ibid. 50) を嘲笑い藁一本にさえ命を賭ける Fortinbras が彼の鈍くなった memory を刺激する。

How all occasions do inform against me,
And spur my dull revenge! (Ibid. 32-33)

このような Hamlet に対する mnemonic device の中で最も重要な、かつすべてを解決してくれるのが Graveyard Scene における Skull であろう。墓堀が無造作に扱っている Skull が *memento mori* のシンボルであったことは当時よく知られていて, Skull と若者を結びつけた, Holbein の絵 *The Ambassadors* が描かれた 1533 年頃までには, それ が *memento mori* のシンボルになっていたのである。⁽²²⁾ そしてこの Skull の持つ究極的な意味は R. M. Frye によれば, それ が "a reminder of all men's ultimate dependence upon God" であることにあったのである。⁽²³⁾ こうした背景を考えれば, Hamlet が Skull によって人間の限界を知ると同時に神を思い出し, それを認識したのは間違いなく思われる。この事は, *Henry IV* 第二部で Falstaff が Bardolph の赤い鼻を見て, それを見れば必ず聖書にでてくる地獄の火を思い出すと語り時に, "I make as good use of it as many a man doth of a death's-head, or a *memento mori*" (3. 3. 28-29) と, 天国や地獄を思い出させる mnemonic device の例として *memento mori* (ここでは Skull の付いた指輪) を挙げている点からも言えるであろう。そしてこれは, その後の五幕二場で Hamlet が海での体験を思い出して "divinity" に言及している点から裏付けされる。しばしば彼は海で神を知ったと言われるが, 海での事件の時は彼はまだ "divinity" を意識していなかったのではないだろうか。恐らく Graveyard Scene で神を知って, そして, 航海途中で眠れない夜, "Rashly" に船室から飛び出して陰謀の手紙を探りあてた事を思い出した時, そこには "a divinity that shapes our ends, / Rough-hew them how we will" (5. 2. 10-11) があっ

たんだと悟るのであり、又手紙をすり替える際、偶然財布の中に父の “signet” があったのは “was heaven ordinant” (Ibid. 48) と思いがたるのだと思われる。

Hamlet はこうして Skull から神を思い出し、そして伝統的な〈記憶術〉においてイメージから “things” を思い出すように、Skull というイメージから次々と、Cain に始まって (“how the knave jowel it [i. e. Skull] to the ground, as if 'twere Cain's jaw bone” 5. 1. 76-77 括弧筆者)、政治家 (“This might be the pate of a politician” Ibid. 78)、廷臣 (“Or of a courtier” Ibid. 81)、法律家 (“why may not that be the skull of a lawyer?” Ibid. 95-96)、道化 (“this same skull……was, sir, Yorick's skull, the king's jester” Ibid. 174-75)、Alexander 大王 (“Dost thou think Alexander looked o'this fashion?” Ibid. 192)、そして Cæsar (“Imperious Cæsar, dead and turned to clay” Ibid. 207) というように、時間的には人類の Creation の時代から、ギリシャ・ローマ時代、先王の時代に至るまで、空間的には人間の位階として大王から卑しい道化までを思い出し、彼の memory の中で神によって造られた秩序ある世界像を統一している。そしてこれに墓堀が Adam の仕事を受け継ぎ (“They hold up Adam's profession” Ibid. 30-31)、彼等の作る墓が “doomsday” まで持つという事実が付け加わって (“The houses he makes lasts till doomsday” Ibid. 59)、この世界像がより完全なものとなされ、あたかも Graveyard Scene そのものが神を頂点とする世界像を思い出させて、それを把握させる mnemonic device のようになっている。

こうして完全に memory の中に世界を捉えた Hamlet は、復讐を神に任せる。というのも〈oblivion〉の現在に memory を復活させ、その内なる memory の中に過去の統一ある世界像を把握させて、そして外においてデンマークの秩序を回復するという彼の目的のうち、前述したような本来の目的の荒削りが終わった今、復讐という最後の仕上げは “divinity” だと認識しているからだ。そしてこの復讐 — public vengeance は、Hamlet を神の minister として当然の如く Providence という形で訪

れるのである。Hamlet は今や完全に神の手の中であって、いつ死が来てもいいようにただ覚悟だけすればいいのだ。

There is special
providence in the fall of a sparrow. If it be now, 'tis
not to come—if it be not to come, it will be now—if it be
not now, yet it will come—the readiness is all.

(5. 2. 217-20)

しかし劇はこのままでは終らない。いつまた oblivion によって、統一された世界が、デンマークが破壊されるかわからないのである。そこで Hamlet は死際に Haratio に対し “Thou livest, report me and my cause aright / To the unsatisfied” (Ibid. 337-38) と、事情が分からない人々に、いかに oblivion によって腐敗していたデンマークの秩序が回復されたかを話し、それを記憶させ、統一された世界像をいつまでも人々の memory の中に刻み込もうとする。彼が “report me and my cause” と言うのは、T. S. Eliot が言うように決して pride からではなく、⁽²⁴⁾ この確立された世界が守られていくのは人々の memory によってでしかないということを知っているからである。Hammersmith が指摘しているように “Hamlet’s dying speech is his injunction to Horatio and to us. Remember me” なのである。⁽²⁵⁾ 亡霊の “Remember me” (1. 5. 91) が過去の世界像の記憶とその確立を意味し、それを Hamlet に求めたように、この Hamlet の ‘Remember me’ も今確立された世界像の記憶を意味し、それを残された人々に求めていると言ってよい。

Yates によれば、地球座を始めとするイギリスの公衆劇場の構造は、小宇宙と大宇宙の調和をその理念とするヴィトルーヴィウスの「世界劇場」であったということだが、⁽²⁶⁾ もしそうだとすればその中で演じられる *Hamlet* という劇そのものが、この調和ある宇宙を記憶させるための荘大な mnemonic device であったと言えるかもしれない。調和ある大宇宙の中の、「世界劇場」の中で、自然を映す “play”, *Hamlet* が荒廃していた世界の回復を観客に見せ、その中の小宇宙たる Hamlet がその内なる

memory の中で更に世界を映し、統一する——劇中劇についての “a stage within a stage within a stage” という J. Kirkup⁽²⁷⁾ の言葉をもじって言葉遊びをするなら、これこそ正しく, “the world within the world within the world within the world within the world within the world” であろう。

注

※本稿は、日本英文学会中部地方支部第33回大会（1980年10月4日）で口頭発表した論文に加筆訂正したものである。

- (1) Frances A. Yates, *The Art of Memory* (Routledge & Kegan Paul, 1966), p. 36.
- (2) Ibid., p. 20.
- (3) Ibid., p. 67.
- (4) Ibid., p. 48.
- (5) Ibid., pp. 58-9.
- (6) Ibid., p. 69.
- (7) *Hamlet*, ed. J. D. Wilson (1934; rpt. Cambridge U. P., 1969)
本論文の引用はすべてこのテキストによった。なお他の作品の引用もこの The New Shakespeare 版による。
- (8) Yates, p. 339.
- (9) この楽園のイメージについては、岩崎宗治, “ルネッサンスの憂鬱,” 「英語青年」(1975年7月号, p. 149) を参考にさせて頂いた。
- (10) 死んだ夫の弟との結婚は “incestuous” (1. 2. 157) であった。この自然に反する行為を, Hamlet は暗に “(A little more than kin, and) less than kind (=nature)” (Ibid. 65) で指摘している。
- (11) ソネット19番で「時」に打ち勝つのは “my verse” (1. 14) である。
- (12) cf. H. H. Furness, *Variorum Hamlet*, pp. xiv-xvii.
- (13) Tom F. Driver, *The Sense of History in Greek and Shakespearean Drama* (Columbia U. P., 1960), pp. 127-28.
- (14) Niegel Alexander, *Poison, Play, and Duel* (Univ. of Nebraska P., 1971), p. 52.
- (15) James P. Hammersmith, “*Hamlet and the Myth of Memory*,” *ELH*, 45 (1978), p. 599.
- (16) Ibid., p. 598.
- (17) ベーコン, 「学問の進歩」, 服部英次郎, 多田英次訳 (岩波文庫), p. 19.
- (18) Alexander, p. 56.

- (19) Ibid., p. 145.
- (20) Fredson Bowers, "Hamlet as Minister and Scourge," *Twentieth Century Interpretations of Hamlet*, ed. D. Bevington (Prentice-Hall, 1968), p. 86.
- (21) 古代ローマの修辞学者 Quintilian は、本のある頁を全部思い出すのに、引金としてその中の一語を記憶することを教えているが、N. Alexander は、亡霊の "Remember me" がその mnemonic device であると言う。
- Hamlet's choice of 'Remember me' and its frequent repetition in the soliloquy is a deliberate mnemonic device which allows Hamlet to call all the details of the Ghost and his command to instant and complete remembrance. p. 47.
- (22) Roland Mushat Frye, "Ladies, Gentlemen, and Skulls: *Hamlet* and the Iconographic Traditions," *ShQ*, 30 (Winter 1979), p. 21.
- (23) Ibid., p. 23.
- (24) T. S. Eliot, "Shakespeare and the Stoicism of Seneca," *Shakespeare Criticism 1919-35*, ed. Anne Ridler (Oxford U. P., 1936) p. 216.
- (25) Hammersmith, p. 603.
- (26) cf. フランセス・イエイツ, 「世界劇場」, 藤田実訳, (晶文社, 1978年)
- (27) James Kirkup, *James Kirkup's Tales from Shakespeare: Hamlet*, 菅泰男編注 (朝日出版, 昭和55年), p. 74.